

(その 160) 自己責任の分断を周りの連帯で青年を救う 2019.1 発行

新年あけまして

おめでとうございます

3年前桜の咲くころに、地方から川崎に働きに出てきたK君はもともと病弱な身体でしたが、両親から自立したいと願い、親の反対を振り切って川崎で働くことにしたのです。

しかし、病弱な体と仕事に馴染めずに職場を転々とし、今年の春に住まいを探すのに相談にいられたのです。川崎区内で、一人住まいにふさわしい部屋が見つかりましたが、病気のため仕事を休みがちで家賃の滞納があり何度も催促をしたのですが、家に引きこもりがちになりました。訪問しても家にはいない様子です。健康も心配になり、何度も家に訪問しますが、次第に会うのも拒否するようになりました。夜に行っても部屋は真っ暗で、人の気配を感じません。

万が一を考え、警察官立会いのもとに部屋の鍵を開けて中に入ったところ、本人はひどく衰弱して横たわっていて反応も弱く、虫の息の状態でした、すぐに救急車を呼び病院に搬送しました。K君は対応が悪ければ一命を落とすところ危うく助かりました。2週間ほどで退院しましたが、働ける状態ではなく、私たちが生活保護の申請をして無事安心して暮らせるようになりました。周りの人が温かく接して、K君は少しずつ快方に向かいつつあります。

このように地域とくらしの相談センターが必ず皆様のお役に立つと思います。

お気軽にいつでもご相談に来てください。